

現代語・現代文化学系研究会発表要旨

月例会 (2003年5月28日)

イスラーム・スペインの滅亡を祝う人々

—グラナダ奪取祭 (Fiesta de la Toma de Granada) 研究準備の中間報告—

宮崎和夫

グラナダ奪取祭は、1492年1月2日にイスラーム・スペイン最後の王朝ナスル朝の首都であったグラナダがカトリック両王によって征服されたことを記念して、現在に至るまで毎年行われている。正装したグラナダ市長や市会議員や県知事らが、15世紀の服装をした青年や軍楽隊を引き連れて、市庁舎を出発して市中を練り歩き、両王の眠る王室礼拝堂で旗を振る儀式を行い、隣の大聖堂で大司教によるミサに参列した後、再び市庁舎に戻り、お偉方はバルコニーに出て、市庁舎前広場には市民が集まり、国歌とアンダルシア州歌の吹奏の後、市議の一人がグラナダとその征服者を讃える文句を唱え、最後は一同が「スペイン」「(現) 国王」「アンダルシア」「グラナダ」に対して一度ずつ¡Viva! (万歳) を唱和して終わる。

グラナダ征服戦争は、火器を多用した近代的集団戦法の実験場であり、しかも軍事的勝利よりも謀略による政治的勝利の要素のほうが大きく、騎士道精神からかけ離れたものであった。しかしカトリック両王はこの戦勝を誇りとし、キリスト教世界全体の勝利として、揺籃期の印刷術も用いて内外に積極的に宣伝したため、祝賀行事が両王の領地のみならずヨーロッパ各地で盛大に行われた。それらの行事の特徴は、神や聖人の加護への感謝、闘牛の開催 (儀礼と娯楽の両面)、聖体の祝日と同様の娯楽、演劇による戦勝の再現などである。

両王の生前からグラナダ市では、毎年1月2日に、戦勝を感謝するためのミサや有力者・高位聖職者の行列が行われていたが、1516年に死去したフェルナンド5世の遺言によって、記念日の儀礼が確立された。大司教に率いられた聖職者中心の行列が、王室礼拝堂で両王の王権の表象を受け取り、これを持って大聖堂の外陣を廻り (その際は「聖王」フェルナンド3世のためにセビーリャの大聖堂で行われている儀礼に倣う)、市中へ出て主な通りを巡り、大聖堂に戻ってミサと説教を行い、終了後、王権の表象を王室礼拝堂に返却する。元日後の最初の日曜にも同様の行列が行われ、さらに市内の全ての聖職者が感謝

頌を歌いながら市中を練り歩き、夜には全市内の塔に灯りが点され、朝課には全市内の鐘が鳴らされる。一連の儀礼の中で誰が主要な役割を果たすかをめぐって、王室礼拝堂と大司教座聖堂参事会、市参事会と高等法院、国王代官と軍政長官の間で 1530 年ごろまで続いた紛争は、スペインでハプスブルク家の支配が確立するまでの過渡期に、多元的な権力集団がそれぞれ新体制下での有利な地歩を固めようとしたことを示す。

トレント公会議後、儀礼は簡素化され、祝日は 1 月 2 日に統一され、グラナダ市のみで正午までとなった。しかし行事には鳴り物と闘牛と馬上槍試合がつきものであった。スペイン文化「黄金世紀」であるバロック時代に入ると、祝祭は華美化し、市参事会が王の軍旗を振る儀式が始まり、聖職者の説教は誇飾主義的美文に彩られた。演劇の隆盛を反映して、ローペ・デ・ベーガの若書きの戯曲に中世末のロマンセをいくつも組み合わせ、恋愛、女戦士、道化師、馬上槍試合などの様々な要素を取り入れた『グラナダ奪取あるいはアヴェマリアの勝利』の上演が始まり、大人気を博した。

しかし、18 世紀ブルボン朝治下の啓蒙専制改革の時代には、高等法院の管轄区域が縮小し、軍政長官府もマラガへ移転したため、グラナダ市は南部中核都市としての地位を失い、祝砲もトランペット吹奏も不可能になる。また、弱体化した教会権力は奪取祭からも撤退し、市参事会が主導して祭典を盛り上げようとするものの、市民の祝祭への関心が薄れ、貴族の経済力も低下したため、闘牛も馬上槍試合も行われなくなる。19 世紀後半になると、個人主義的傾向が強まって公的な祝祭への関心はますます薄れ、立憲制政党政治という新体制の下で市の権力構造も激変し、政争に明け暮れる市議会諸会派は祝祭振興のための有力な手段を講じることができず、奪取祭に関心を持つのは、近代化の中で失われ行く民衆の習俗を研究して記録に残そうとする知識人ぐらいだった。20 世紀のフランコ將軍の独裁下で、奪取祭は特に振興されることもなくなく、それ以上衰えることもなしに存続した。ただし、「奪取」の代わりに「レコンキスタ」の語を多用して、グラナダ征服を「スペイン国民」の勝利と位置づける言説は、18 世紀にその萌芽があったが、フランコ時代に確立した。

独裁政権崩壊後、1980 年代の民主化と地方分権化の流れの中で、グラナダはアンダルシア自治州の一部となり、奪取祭には州政府代表者も加わるようになった。しかし、アンダルシア独立運動の活動家はそれに飽き足らず、自らをアンダルス人の子孫と混同し、奪取祭を「カスティージャ帝国主義」の表出と見て式典妨害を毎年繰り返すようになった。他方、20 世紀後半以降漸増した

マグリブ諸国からの移民も、ムスリムの敗北を祝う式典に不快感を表明するようになり、1989年にはアラブ諸国の駐マドリッド大使が、グラナダ奪取祭を廃止するようスペイン中央政府に求めた。それを受けてグラナダ市当局は、「奪取」の語を「明け渡し (entrega)」に代えることで事態の收拾を図ろうとしたが、今度はグラナダ市民保守層の猛反発を受け、文化担当市議が辞表を提出する騒ぎに発展した。500周年記念にあたる'92年は、地元の公的機関や諸団体が相互に対立したために盛大な祝賀行事の計画は頓挫し、珍しい出来事といえば、マドリッドのネオ・ファシスト団体が「新たな十字軍」を主張して会場に乗り込んだものの市民のブーイングに遭って退場させられたことと、アンダルシア主義者とムスリムの共催で「グラナダ哀悼」式典が別の場所で行われたことぐらいだった。

米国の同時多発テロ以降、グラナダ市民のイスラームに対する態度は硬化した。奪取祭の戦勝記念的性格を薄めてムスリムに配慮を示すことで、これを「二つの文化の再会」の場にしようとしてきた市政与党社会労働党の試みは、野党国民党や地元有力言論人の攻撃で頓挫した。2002年の式典は旧来のやり方に戻され、他方でネオ・ファシスト団体には市庁舎前広場に居場所が確保された。2003年の統一地方選挙で国政与党国民党が全国的に退潮する中で、グラナダでは国民党が勝利し、保守化傾向はますます強まるものと思われる。